

「歌のわかれ」の主題

河 内 光 治

【要旨】「歌のわかれ」は、大正十三年の早春、片口安吉が金沢の四高で在学四年半の卒業試験を受ける頃から、卒業して東大に入り、馴れない都会生活を送り、新しい出発を決意する六月頃までを描いた中野重治の短篇小説であるが、一般にわかりにくいと評されている。それは一貫した物語りとして筋を追うには、羅列されたエピソードが断片的で、それらの関係が説明不足であり、表現が主人公の心情に即した感覚的描写に終始しているからである。然し私は、結果的には、この奔放な手法が成功し、中野の作品の中では例外的に、主題が重層的に積み上げられ、それが完遂されていると思うものである。以下それを論証したい。

一

「歌のわかれ」は、雑誌『革新』の昭和十四年四月号から八月号（六月号は欠）まで、四回に亘って連載された。当時、革新という言葉は、革新官僚という熟語があるように、右翼的な国家主義的主張を持つ意味で用いられていたから、この言葉を誌名に掲げた雑誌の性格は、勿論国策遂行の線に沿っていた。その雑誌が、昭和十四年の春に、中野に小説を依頼する。中野は、昭和十二年末から執筆禁止の措置を受け、中国大陆の軍事作戦が一段落した昭和十四年になって、その措置が緩められたのである。緩められたと言っても、一般の雑誌がそれにとびついて中野に原稿を依頼することは勇気の要ることであった。そ

の点、『革新』の立場から言えば、そういう気遣いは無用であったと思われる。執筆の事情は、全集第五卷（筑摩書房、昭51・11刊）の「著者うしろ書」によれば、次のようである。

中野が依頼に応じて書くこと返事し、編集者に会うと、その男は、「むかし新人会で私たちに唯物論哲学についていろいろと講義してくれた見覚えのある男だった」。中野は驚くが、「話はてきばきと進んだ」。編集者は中野に対し、「作者は自由に、ただ対中戦争にだけは触れずに書いてくれ」と言う。一人の転向した編集者が、困窮している中野に或る救済の手を差し延べた、というのが真相であろうか。

舞台を提供された中野は、自分の青春の形成期、即ちプロレタリア文学運動に入って行く前の出発点を題材に選ぶ。対中戦争は批判でき

ないということから、運動に加わった以後のことは取り上げにくいという外的な事情もあったであろうが、この時期の中野にとっては、転向をした自分の人生を検証しなければならない内的必然性があつた筈である。それは敗北を重ねて来た出獄後の挫折について、自己確認の作業を行わなければならないということである。これには多少の説明を要する。

昭和七年四月四日、コップ指導部の一斉検挙という事態の中で、保釈を取り消されて再入獄した中野は、二年余の獄中生活の後、昭和九年五月、日本共産黨員であつたことを認め、以後政治活動をしないうという「上申書」を書いて出所した。懲役二年、執行猶予五年の、即日執行の控訴院判決である。この中野の転向の実状は、出所後の作品によれば次の通りである。

取り調べ官の八十島の「君は党组织にはいつたことを認めるかね?」という問いに、「認めません」「つまりはいつていなかったから認めないのです」と答える(鈴木・都山・八十島、「文芸」昭10・4月号)。控訴して「彼は再び保釈願を書き、政治的活動をせぬという上申書を書き」、肺浸潤で病室に入れられる。そこで彼は「それまで物理的に不可能に思われていた「転向しようか? しょう……?」という考えがいま消えた」のを感じ、「うれし涙」をこぼす。然し、弁護士に会い、保釈実現に「不足している部分」の説明を受け、「錯乱」する。あくる日、彼は問題の点、非合法組織にいたことを認める

ことにすると答えるのである(「村の家」、『経済往来』昭10・5月号)。出所した中野は、妻と妹の前に手をつけて謝る。その頃の中野は、「壁にくっつくように向うを向いて寝ころんでいて、頭をかかえるようにして」いたのである。

中野の出所後の第一作は、昭和九年十一月八日に擲筆し『中央公論』昭和十年一月号に発表された「第一章」である。この題名について中野は、昭和十一年十二月に竹村書房から刊行された二番目の小説集『小説の書けぬ小説家』の序で、「この中にある「村の家」「小説の書けぬ小説家」「一つの小さな記録」などは、互いに肉身的関係に立つもので、ここに入れなかった「第一章」「鈴木・都山・八十島」などとも同じ関係に立ち、それらがみな集まって一つに仕上がった場合始めて本来の「第一章」になるのだが」、とその意図を説明した。更に戦後昭和二十二年十二月に刊行された筑摩版選集Ⅲ『第一章』の「はしがき」では、「わたしは、千九百二十七～八年ごろから三十四年ごろ、ここに形となった「第一章」のかかれるころまでの問題を「第一章」として総括し、第二章、第三章へと続く日本のある流れをかきたかった」と書いている。つまり転向して出獄した中野は、自らのプロレタリア文学運動への踏み切りと裏切りという二つの時期を核にして、壮大な社会小説を構想していたということになる。⁽²⁾

「村の家」の終わりの部分で、父親の孫蔵が転向して出て来た勉次に向かい、「いったいどうするつもりか?」と今後の方針を訊き、「お

父っあんは、そういう文筆なんぞは捨てべきじゃと思うんじや」と言うのに対し、「自分は肚からの恥知らずかもしれない」と思いながらも、勉強は「よくわかりますが、やはり書いて行きたいと思います」と答える。この部分は昭和九年十二月二十日に擲筆され翌十年二月号の『行動』に発表された『「文学者に就て」について』の中の有名な次の一文に照応して、「第一章」以下、「日本のある流れ」を創作化しようとした昭和十年当時の中野の決意と姿勢を鮮やかに浮かび上がらせている。

僕が共産党を裏切り、それに対する人民の信頼を裏切ったという事実は未来にわたって消えないのである。それだから僕は、あるいは僕らは、作家としての新生の道を第一義的生活と制作とより以外のところには置けないのである。もし僕らが自ら呼んだ降伏の恥の社会的個々の要因の錯綜を文学的綜合の中へ肉づけすること、文学作品として打ち出した自己批判を通して日本の革命運動の伝統の革命的批判に加われたならば、僕らは、その時も過去は過去としてあるのであるが、その消えぬ痕を頬に浮べたまゝ人間および作家として第一義の道を進めるのである。

然し、この日本のある流れを書こうという創作路線は、昭和十一年一月号の『改造』に発表された「小説の書けぬ小説家」で一応終わってしまふ。それまでの作品も、末尾に「未完」と書かれたりして完結したものとはとても言えないが、この「小説の書けぬ小説家」は題名

「歌のわかれ」の主題（河内光治）

通りの内容であった。手法も私小説的な方法に傾斜している。昭和十年には、改組して小林秀雄が編集を担当した『文学界』に「控え帳」を一月号から連載し、この秋同人に誘われ、それを断っている。そして十二月には林房雄の提唱した「独立作家クラブ」に参加し、会の性格について林と意見を異にしている。⁽³⁾

昭和十一年になると、「ある日の感想」（『文学評論』昭和11・3月号）以下、『文学界』の小林、横光、林、島木等への論難が息吐く間もないくらいに発表される。それに比例して小説の方は減っている。二・二六事件から国内状況は緊迫して行く。昭和十二年六月号の『中央公論』に発表された聞き書き風の「汽車の罐焚き」が執筆禁止前の最大の作品である。七月七日の蘆溝橋事件からの「支那事変」の拡大につれ、中野は宮本百合子等とともに最初の執筆禁止の措置を受ける。「探求の不徹底」（『帝大新聞』昭和12・11・8日号）に対する島木健作の反駁に答えた「島木健作氏に答え」は六七枚の力篇で、『文芸』の昭和十三年一月号に発表予定でゲラ刷りも出ていたのであったが、この措置のため、陽の目を見たのは敗戦後七年も経った昭和二十七年六月に東方社から刊行された『政治と文学』の中であった。執筆（発表）もできぬまま、妻子は養わねばならず、東京府の失業対策事業により千駄ヶ谷区役所に戸籍係として勤める。出獄直後の中野の壮大な抱負と決意は、こうして時局の荒波の中で、全く脆くも押し潰されてしまったのである。

かくて、創作の面で「第一章」以下、日本のある流れを社会小説的な構想の上に描き出そうとした意図を断念させられた中野は、運動を個人的な側面から、即ち、「自伝的な作品」として書き始める。「留守」と「鶉の宿」である。「留守」は『中央公論』の昭和十五年一月号、「鶉の宿」は『改造』の昭和十六年三月号に発表されたものであるが、選集Ⅲ『鶉の宿』（筑摩書房、昭23・2刊）の「はしがき」によれば、「留守」と「鶉の宿」とは千九百三十八年ごろの執筆禁止まへの作」と書かれてある。書いたけれども、執筆禁止のために発表できなかったものと思われる。この二つは、昭和四、五年の運動の最盛期の中での恋愛と結婚を扱っている。中野が新劇女優の原泉と結婚したのは昭和五年四月十六日であるから、中野が「自伝的な作品」と呼ぶ以上、主題は、運動よりも結婚の方に置かれていたと見るべきであるが、中野自身、「書き出しで切れてしまった」と言うように断片的な作品である。

そして執筆禁止となり、翌年春に『革新』から小説を頼まれる。「自伝的な作品」の中で、青春の形成期、人生の出発点選ばれたということは、以上の経過からして、極めて必然的なことであったことがわかる。「歌のわかれ」は完結し、中野は自己検証の結果、己の選んだ道に誤りはなかったと確信する。続いて、『文芸』の昭和十四年八月号から十一月号まで「空想家とシナリオ」が発表される。執筆禁止当時の区役所勤めの頃を題材にして、生活の苦渋を描きながら筆致は軽快である。車善六という主人公は生き生きとしている。これは、

中野が「歌のわかれ」を書き終えて、今後の生き方に自信を得たからだと思われる。昭和十五年の六、七月号の『中央公論』に発表された「街あるき」は、題材の上では「歌のわかれ」に続く大学生活を描いたものであるが、例の断片的なもので、主題らしいものも展開されず、「歌のわかれ」の続篇とは言い難い。むしろ、戦後の「むらぎも」の部分的な断片と言うべきものである。

「鑿」「手」「歌のわかれ」の三部から成る小説「歌のわかれ」は、中野の作品全体の中では、このような分水嶺の頂点に立つ作品なのである。

二

「歌のわかれ」の主人公片口安吉は、以後「街あるき」「鶉の宿」と登場し、戦後は、「むらぎも」(『群像』昭29・1・7月号)、「梨の花」(『新潮』昭32・1・33・12月号)という代表的な自伝小説のほか、その前にも登場している。⁽⁴⁾尤も「鶉の宿」は「歌のわかれ」より前に執筆されたらしいが、中野の自伝物の主人公として片口安吉が定着したのは、「歌のわかれ」からと言って差しつかえはない。

安吉という名前は、いくらか卑下したような意味合いであろうと思うが、片口という姓には意味があるように思う。片口という一般語は、当事者の双方からでなく片方からの話という意味が普通であるが、この主人公の場合には、口下手な性格を示しているのではない

かと思う。片口君の口下手というのは、心の中では人一倍鋭敏繊細な心情を感じているのだが、それを十全な表現で口に出さなければと想っているうちに機を失ってしまう、心の豊かさ細かさを言葉として表現できないもどかしさ、である。「鑿」の始めの方の監獄の建物を入れた風景画を描いていて囚人と会う場面は、その意味で片口の性格を端的に示している情景である。安吉は自分の楽しみでしている油絵を描いていることが、楽しみの少ない囚人たちに楽しみを与えることに仕合わせを感じて筆を動かしていたが、別れの時、「どうもありがとうごさした」という囚人の挨拶に、「恰好な返事がみつからな」いまま、にやりと笑うだけである。囚人たちは誤解し、「囚人だからというて返事してもらえんわい……」と言って去って行く。安吉はそれを耳にすると、「非常につらく、気のきかぬ自分の性癖に足ずりするような敵意を感じた」のである。片口という姓は、この充分に表現できない安吉のもどかしさを象徴しているのではないだろうか。

「歌のわかれ」の手法は、この囚人との出会いの場面のように、安吉の心情に即し、その起伏を追うことが基本になっている。時間の経過とともに、高校を卒業し、東京での大学生活に失望し、己の新しい生き方を、短歌的なものとの別れという形で発見するという大筋はあるのであるが、その具体的な展開は極度に削り落とされ、断片的なエピソードの羅列に終始する。そしてそのエピソードは、安吉の心情に即してだけ辿られて行く。この場合、注意しなければならないのは、安

吉の心情が安吉だけのものとしてでなく、相手に響いて行き、更にそれが安吉にはね返って来る、その他者との交わりの中で辿られて行くということである。監獄の場面で言えば、始め安吉は仕合わせを感じている。それが囚人たちに誤解された時、自分のぼんやりさに敵意を感じるのである。安吉の心情とは、単に安吉個人の心理ではなく、それが相手に伝わり、跳ね返って来た時の心理という、往復運動を経た心理なのである。ここに、片口安吉の独自の自意識があり、この自意識を軸にして、「歌のわかれ」の世界は形作られている。

「鑿」の前半では、四年半の高校生活の中の友人関係が断片的に語られる。特に、鶴米金之助との短歌を中にした交わりは、文学青年らしい若さに溢れている。そして舞台は在学四年半の終わりの卒業試験の時期に廻って来る。作文の時間に「三年間の思い出」という作文を書かされ、安吉は気が滅入る。二十三にもなって小説の一つも書こうという人間が、こういう綴り方を書かされ、それで点を稼がねばならぬとは。もう少し勉強しておけばよかったという後悔と自己侮蔑が第一。第二が許婚者がいる頼子に惚れてしまい頼子を苦しめたこと。自身の頼子に対する気持ちよりも、頼子を苦しめたという記憶がこそげ落とせない。頼子という女性とどうして知り合い、どういうことになったのか、その具体的なことは何一つ書かれていないが、この場合には、安吉の心情として、頼子を苦しめたことだけで充分だと思われ、技法上から見ても、当然のことと言えよう。例えば、本多秋五氏

は、これを書かない理由を「並はずれた彼の羞恥心のなせる業である(5)」と評しているが、この作品では、そういう自然発生的なものではなく、明らかに構成上の技法として捉えていいのではないかと私は思っている。そして第三に、「震災の物語とその後のさまざまな世情とが彼の気持ちを重苦しくしていた」と書かれるが、頼子の場合と違い、この震災の場合は明らかに説明不足である。当時の中野には、朝鮮人虐殺ということが最大の関心事であつたろうが、そのことは書けなかつたので、これだけの記述にしたと思われる。然し、説明を省略することは、技法上許されないことと思われる。

これらのことが重なって安吉は、出口の見えないトンネルの奥深くに追い詰められたような、暗い世界の中で自分を見つめている。その中で、苦学生の泉という学生が訪ねて来て、社会主義の話をしかけて帰って行ったことが、少し触れられている。安吉は、「大人びて」「ほんとうの親切さ」のある泉とおして来たことにより、「そういう話がよくわからねばならぬ義務のようなもの」を感じるのである。この受け取り方も、いかにも安吉的である。社会主義の中味よりも、泉という男の人間らしさが安吉には重要なのである。言うまでもなく、こういう受け取り方は、問題の本質をすりかえてしまう危険が多分にある。「むらぎも」の中では、それが目立ち、一つの否定的な要素となっている。(6)

そして、佐野との劇的な場面で「鑿」は終わる。「佐野の無礼は許

せるが、佐野の無礼をお前が許すことは許せぬぞ」という安吉の決意は、彼の自恃の現れだけではない。出口の見えないトンネルの中にいる安吉は、「ほとんどやけくそになっていて、自分が亡びる時には他人もひきずりこんでやろうという哲学で、腹がまっくらになるほどいらしている」佐野等の世界に、もう一步のところまで来ているのである。佐野の無礼を認めることは、この非人間的な佐野の世界に、自分も落ちて行くことを認めることになる。徳俵でこらえるように踏みとどまり、何としても安吉は佐野の世界から離れなければならない。四年半の生活の果ては真つ暗闇である。然し、だからと言って非人間的な世界に堕ちてはならない。それが、「佐野の無礼をお前が許すことは許せぬぞ」という自己規定の中味なのである。安吉の研ぎすまされた自意識の現れだけではなく、追い詰められながらも人間的に逃れようとする決意の現れなのである。腹がまっくらになるほどいらしている暗黒の世界から、一步脱け出そうとする最後の意志、それがこの言葉の意味しているものである。ここところは、ともすれば、安吉の誇り高き自意識の証拠にされているが、そうではない。安吉は必死だったのである。

三

「鑿」は暗いトンネルの中で安吉の自意識が、自身の内部へ内部へと深く沈下して行っているところで終わるが、どうやら卒業できそう

だと出口に仄かな明りが見えて来たところから第二部の「手」が始められる。安吉の意識は絶望の自己侮蔑から、将来に向かつてのための過去の反省に変わる。佐野を刺そうとして再びブラジルに入った時、佐野は既にいなかった。そのどたん場に突き当たらなかったということは、自分の「精神の貧弱さ」が原因していると安吉は思う。こうして自分は窮地に落ちることなく一生を過ごすのではないか、それは、「人間として低い水準をずるずる滑ってゆく」ことになりはしないか。この反省が、安吉の再生の第一歩である。自己の内部に閉じこもることではなく、自分の外へ出て行かなければならぬ。安吉の意識は外部を志向する。

試験も終わり、安吉は泰文堂に行つて親父が前から言っていた蔵書の整理を承知する旨伝える。出ようとした時、一人の下級生が倫理の教科書を買おうとするが、二円六〇銭と親父に言われて考え込んでしまふ。それを見て安吉は、自分の使った教科書をやるから買うのは止せと言ひ出す。「鑿」の安吉には考えられない明さである。そして、彼は公園の入り口で女学生の群を追いつつ、二年ほどこつち、背中から頭のとっぺんまで無数の虫が奔りのぼるといういまましい癖に悩まされていたが、それが来なかったのである。今までの彼は追いつく時、「来るぞ」と思っていたのだが、今回は「来るかな？」と疑問に思っていた。安吉には、今後絶対に虫は出ないぞという自信ができる。

「歌のわかれ」の主題（河内光治）

安吉は公園の崖の上に行く。そこから景色を眺めるのが好きだった。

崖下の街は陽がかげりかけていた。それから向うは、瓦屋根も板屋根もすっかり陽を浴びていた。場末があり、畑があり、丘があり、そうして東の山になった。前山の雪はもう消えていた。黒い前山の間から覗けた奥山だけがまだまっ白だった。

湯屋の煙突が見えて鶏の声などがした。（中略）

眼に見えるかぎり、風呂屋、桶屋、その他の店屋、豚や鶏、畑の野菜、川や用水や藪かげの村の家、それから谷あいの部落から尖った杉の植林まで、動いている人影をも入れて眼に見えるすべては人の営みだった。

ここで安吉の意識は「人の営み」に絞られて来る。この「人の営み」を明確に意識するところに「手」の主題がある。それは今までも漠然と感じていたことであつたが、今度は、それが実に明らかな形で認識されたのである。そして、「一面が営みであるなかで、おれには営みがない」という悲痛な呻き声を洩らす。人の営みとは、生活であり、そしてそれを生み出し、支えている労働のことと言ってよいだろう。即ち、ここで安吉は、働くという人間の一番基本的な生活の意義を、自分のこととしてはっきり掴み取つたのである。自己の内部から眼が外界に向けられた時、安吉は、人間が生きていることはどういふことなのか、そしてその立場に立つ時、自分がどれほど「ダルな」存在で

あったか、痛いくらい思ひ知ったのである。

金之助はじたばしたところで仕方がないと試験を放棄していた。

そして養家先きとも別れ東京に行くと言う。その出発の夜、二人は高等工業の物理学の教授の沢村さんの家に行き、歌会に出席する。終わって、そば屋で酒を飲んでいる時、「いいねえ、沢村夫人……」というような言葉が二人の間で何度も出る。そして、「ああいう家と団欒とは、現在も将来も彼等には遠い」と二人には思われた」と書かれている。学校の保証人とも、自分を開業医にしようとする養家先きとも喧嘩別れして、実家にも寄らず東京に出、これから自活して行こうとする金之助の前途は峻しい。そこに小市民的な平安な生活が待っているとは思われない。その時、安吉も、そういう小市民的な生活とは無縁であらうと思うわけだが、ここのは、矢張り飛躍し過ぎていると思う。勿論、片口安吉の今後について、中野の実人生を投影して読んでいる者には、極く当たり前の展開ということになるし、全体として見れば、「鑿」の中の泉という社会主義学生のエピソードとも照応し、短歌との別れという主題から見れば首尾一貫していると言えようが、この「手」の時点での片口安吉の心情としては、どうしても説明不足だと思ふ。ここには中野の実人生にもたれかかる自伝小説の弱点が露呈していると言わなければならない。この小説の結末まで来れば、安吉には沢村夫妻の平安な生活が無縁であることは納得させられるだけに、この部分の描き方が惜しいのである。

そして「手」の結末部である浅野川の鉄橋の場面になる。黒い貨物列車が安吉の方に進んで来る。安吉の眼の前を通り、機関車は鉄橋を渡り終える。後部はまだ鉄橋に残って安吉の前を通過しつつある。その時、突然機関車から一つの手がショベルをつき出したかのような調子で機械的につき出される。列車の後部からもう一つの手が出たのを見た時、安吉はぶるツとする。

二つの手は、指をそろえた掌のほうを向き合わせにしたまま、列車の殆ど全長をへだてて瞬く間停止し、こくりとうなずき合ひ、ふたたび元へ戻ってそのまま中へすつと消えた。その消え方は、人が中にいて、外へつき出していたものを再びすつと引つこめたのと同じ調子だった。安吉は、脊骨のなかの孔がふめたくなるような気持ちでそれをその非常に短い時間のうちに見た。

この結末の一節は「手の恐怖」として、「歌のわかれ」の中で最もわかりにくいものとして諸家に論難されて来た部分である。最近の木村幸雄氏の『中野重治論』⁽⁷⁾の中でも、氏は、「この戦慄と恐怖は、中野重治の青春の鋭敏で独自の感受性と〈実存〉の深部からよびおこされたものであったと思われるが、いったいその根源は何なのか。それがわかりにくいし、そのわかりにくいということ自体のなかに問題がある。」と迫っているのだが、続けて、「作者は、ここで主人公の主体の内部におこった深い戦慄と恐怖について、口をとぎして語らない。」と匙を投げたかたちで断定している。然し、中野は「恐怖」だの「戦

慄」だとかいう言葉は使っていない。況して、実存などという消化の悪い言葉も勿論使っていない。「ぶるッとした」、「脊骨のなかの孔がつめたくなるような気持ち」としか書いていないのである。これは、「恐怖」ではない。強いて熟語にすれば、「畏怖」であろう。

既に見て来たように、安吉にこの畏怖を起こさせたものは、「おれには営みがない」という認識である。人の営みの中で、鉄道従業員の鍛え抜かれた労働の象徴である二つの手の動きが、これからの安吉の生き方に、言いようのない指示を与えたのである。四年半かかった高校を卒業し、新しい東京での生活を前にして、安吉は脊骨のなかの孔がつめたくなるような気持ちを味わったのである。それは、人の営みについての感動であり、労働の厳しさに対しての畏れである。それが鉄道従業員によって現されたのは、中野の機関車への偏愛と呼んでもいいような熱情からである。「彼は巨大な図体を持ち」で始まる詩「機関車」⁽⁸⁾は、「輝く軌道の上を全き統制のうちに驚進するもの」としての讃辞に包まれているし、昭和十二年の「汽車の罐焚き」の中では、福井金沢間の登り百分の一勾配で、文字通り必死になって石炭をくべ続ける火夫の苛酷な労働が力強く記録されている。⁽⁹⁾これら幾つかのイメージをバックにして、貨物列車の二つの手は描かれている。

こうして「鑿」から「手」へと、絶望から再生への主題は、実に明確に辿られていると思う。その技法が安吉の心情に即しているため、感覚的表現が殆どを占めて説明されないままに投げ出されていること

「歌のわかれ」の主題（河内光治）

が、一般的にわかりにくいと感じさせるのであろうが、この文体の故にこそ、青春の清冽な抒情が溢れ出ているのである。「手」の結末部は、その代表的なものの一つである。

四

第三部の「歌のわかれ」は雑誌に二回に分けて発表されたものであるから、分量もそれだけ多い。四〇〇字詰めで、「鑿」が六五枚、「手」が七〇枚、「歌のわかれ」が九〇枚、計二二五枚といったところである。第三部は、東京の生活の中で安吉が短歌的なものとの別れを感じ、新しい出発を決意する主題を展開するわけだが、そのポイントは、安吉に馴染めぬ都会性という一点に絞られている。そのため、前の三分の一くらいが、上京前の安吉の生活に当てられている。これは後半の、東京の持つ浅薄さ、非情さに対する必要上の布石であり、東京で寄宿する本所にある従兄の酒屋も、謂わば、金沢を含めた地方の、東京での拠点ということになる。

上京の前日、安吉は養子に來た父の実家に寄り、従兄への土産の露の束をかかえて帰って来ると、父は「さんまい」に行っているというので自分も行く。「さんまい」とは墓地である。ここは、安吉一家だけのものであるが、人家が近いため火葬を禁じられ土葬であった。父は、「養子に來たもんじゃから、何じや、村のさんまいで焼いて貰おうと思う」と独り言のように安吉に言う。安吉は、父の遠慮ぶかく義

理がたい、律儀さを思い知る。

金沢に出て急行に乗るまでの間、安吉は、二度目に下宿していた寺を訪ねる。そこで安吉はお婆さん達三人の女からなつかしがられ、昔いた二階の部屋にあがる。監獄の絵のことも、頼子とのことも、二度目の落第のことも、この部屋にいた頃のことである。安吉を囲んで思ひ出話に花が咲く。

上野駅に着くと、従兄の武四郎が迎えに来ている。金之助が訪ねて来たとは知らされる。この部分までは、淡い中間色の思ひ出色とでも言うべきものにぼかされて、安吉の身に染みついている土着性が、その根柢を支えている。北陸の純朴な人情、律儀な農民性が基調低音として響いている。謂うまでもなく、この後の都会性に対応しているのである。

大学に行っても、安吉は聴講届をまとめることができない。「ぼんやり」の彼には、重なった時間割を調整することができないのである。貯金局に勤めている金之助に頼もうかと思うが、あまりに馬鹿げている。東京の街そのものも彼を快活にしない。箱のような恰好をして壁も使われず、沈んだ紺色の瓦も見えない。

ある日、大学の構内で二人連れの大学生に追い抜かれる。二人は女学生のようにきやつきやつと有名な双生児の女子運動選手の名前を言っていた。この場面に、「わたしの心はかなしいのに」に始まる詩「あかるい娘⁽¹⁰⁾」が出て来る。女の選手にきやつきやつ騒ぐ大学生の世界

は、安吉には余りにも遠い。大学生活に少しも溶け込めない安吉の静かな苛立ちが、「かなしみ」としてこの詩に捉えられている。かなしい、は漢字を使えば、悲しい、愛しい、ではなく、哀しい、であろう。何かをしなければならぬと感じながら、何をしたいのか打ち込むべき対象が見つからぬままに空転を続けている虚^{うつろ}さ、その満たされぬ思いが「かなしい」の実体なのである。

そのすぐ後、彼は野菜市場のそばを通りかかり、そこからの匂いを「瘦せた両肩を首根っこへ引き上げるようにしてきゅうっと吸い上げる。薤の匂いであり、辛菜の匂いである。眼を移せば、山のように積み上げられたキャベツがあり、白菜があり、まっ紅な生薑の山が濡れている。

それらの匂いと味の記憶とは、今の安吉に取って全身的にうつんと来るものだった。舌ばかりでなく彼の精神が唾をたらすようだった。彼は玉葱を切った時か何かのようにうっすらと泪ぐんて来た。

かなしい安吉は、未だ東京での生活が掴めず、土着的農村への郷愁に涙ぐむだけなのである。

二カ月経って安吉は藤堂高雄を訪ねる。藤堂は安吉が長い間愛して来た詩人であり、「現在は流行作家の一人である。二階に案内される時、東京風の折れまがった階段を通りながら、そのせせこましさにある反撥を感じずにはいられない。座敷にいた、人を人とも思わぬ無礼

な二人の東京風の文学青年、出て来て少し話した藤堂の無愛想さ。この三人の儀礼にかまわぬ態度が、安吉には全く異質なものとして抵抗感を生む。安吉は今でも藤堂の芸術を愛しているが、それは印刷された作品の上だけのことで、「人生に対する実際の態度において」その行き方には、「どこかで根本的に違っているものがあるかも知れぬ」と深い疑問に襲われるのである。それは裕福な家に育った「いい家のぼんち」の藤堂と、百姓の倅である安吉の差でもあろうし、安吉の持つ田舎者らしい律儀さと、他を顧みぬ都会性との差であらう。

一と通り聴いてみた講義にはどれも失望する。金之助には会っているが、金之助は文学雑誌を出したいと言う。安吉も雑誌が出せれば、今の嫌った気持ちなどは一度にふっとんでしまふだろうと思う。そして彼は汚い共同便所に入り、急いでしゃがみ込もうとして、ひよいと下を見て、外に飛び出してしまふ。彼は「心の底からふるえあがるような光景」を見せつけられたのである。円錐形に盛り上がり、尖端が踏み板の平面よりずっと上までのし上がっていた糞の塊。「それは大都会の亡霊ともいふべき無気味さで彼におそいかかった」。この場面は、感覚的描写で統一されているこの小説の中でも、実に痛烈な部分である。安吉に襲いかかった東京の非情性を、鋭く的確に描破している。

もう、安吉は徒に田舎への郷愁に溺れていてはならない。この非情な大都市の中で、彼の生きて行く道を見つけないければならない。大学

「歌のわかれ」の主題（河内光治）

の構内での歌会の場面でこの小説は終わる。安吉が別れを感じた短歌の世界とは、昭和二年の有名な詩「歌」（『驢馬』九月号）の中で、「お前は歌うな」と自らに禁止した世界である。「赤ままだ花やとんぼの羽根」、「風のささやきや女の髪の毛の匂い」、は小市民的な平安の世界であり、同時に土着的な過去への郷愁にも繋がっているのである。近代的な労働を軸にした都会での生活を、安吉は始めなければならぬ。ニキビの消えた一面の孔だらけの顔の皮膚をさらし、「彼は兇暴なものに立ちむかって行きたいと思いはじめていた。」という結びの一句は、金沢の頼子、沢村夫妻、村の家の家族との世界から脱け出し、金之助と出そうとする雑誌を含めて、「営み」の中に入って行こうとする安吉の姿を鮮明に浮かび上がらせている。

こうして、昭和十四年という困難な時代に、自らの歩んで来た約二十年の挫折と敗北の、その出発期を検証した中野は、その後の歩みの間違っていないかったことを、改めて自己確認したのである。エピソードの羅列という一見平板に見える手法と、安吉の心情に密着した感覚的表現の中に、少年らしい絶望から再生し、より大きな社会へと出て行こうとする青春そのものが、主題として確実に構成されていると言える。

註

- (1) 平野謙「中野重治序論」『群像』昭和39・10月号、全集第五巻、新潮社、昭和50・8月刊、所収）の中の渡辺順三からの引用。

幾徳工業大学研究報告 A-4

- (2) 拙稿「中野重治論」のⅠ「むらぎも」について（幾徳工業大学研究報告A-1、昭51・3月刊）参照。
- (3) 拙稿「私小説論」考（幾徳工業大学研究報告A-2、昭52・3月刊）参照。
- (4) 「アンケート断片」（『世界』昭25・2月号、「文芸」昭25・1月号、「新潮」昭25・2月号）、「写しもの」（『人間』昭26・1、2月号）、「その身につきまとう」（『改造』昭28・1月号）など。
- (5) 本多秋五「第一章「その他」」（筑摩書房、「中野重治全集」第二巻「月報」、昭34・6月刊）。
- (6) （2）項に同じ。
- (7) 木村幸雄「中野重治論 作家と作品」（桜楓社、昭54・5月刊）の中の「歌のわかれ」論。
- (8) 「機関車」は「驢馬」の大正十五年九月号に発表された。
- (9) 戦後も、童謡の「きかん車」が「ゴドモのハタ」の昭和二十一年四月号に発表されている。
- (10) 「あかるい娘」らは「裸像」の大正十四年一月号に発表された。

昭和五十四年九月十七日受理